命を守りぬくために主体的に学び行動することができる児童の育成

日田市立東渓小学校

Ⅰ　学校規模および地域環境

１　学校規模

学級数７　　児童数８２　　職員数１６

２　地域環境

本校は、日田市の南東部にあり、標高１５０ｍ～３００ｍに位置し、恵まれた自然環境の中で、国道２１０号線沿いや傾斜地、谷間、台地に集落が点在している場所に位置する。平成２４年度に旧馬原小学校・旧丸山小学校・旧台小学校・旧桜竹小学校の４校が統合して誕生した。そのため、地区ごとに固有の地域性を持ち、小規模校だが校区が大変広く、ほとんどの児童がバス通学である。

校舎は谷間にあり、裏は崖（土砂災害危険個所）、崖下には矢瀬川が流れており、地域の避難場所には指定されていない。

４月１４日、１６日の熊本・大分地震では、校区に大きな被害はなかったが、飲み水が濁った地域や、数日間の避難所生活を余儀なくされた地域に居住する児童もいた。

Ⅱ　取組のポイント

【１】訓練の目的を明確にし、全校一斉避難訓練、及び引き渡し訓練を行い、実効性のあるマニュアルの作成に取り組んだ。

【２】低学年、中学年、高学年が、それぞれの最終的な目標（成果物）を決め、計画的に防災学習に取り組んだ。

Ⅲ　取組の概要

１　取組の趣旨やねらい

本校は前後を山に挟まれ、裏手に崖や川があることで、大雨の際に崖崩れや洪水・土石流が心配される。いざという時に最善の避難をし、全員の命を守れるように準備をしておく必要がある。そのため、全校一斉避難訓練、及び、児童引き渡し訓練に取り組み、マニュアルを見直した。

また、垂直避難訓練後、「もし、このように３階に避難し、そのまま学校に宿泊しなくてはならなくなった場合に必要なものは何か？」について児童に考えさせ、非常用リュックの用意（個人の備蓄）につなげた。

また、研究テーマである「命を守りぬくために主体的に学び行動することができる児童の育成」を目指し、１・２年生は、学校の近くを流れる川と下流の川（三隈川）の様子を比べ「自分たちが暮らす地域の環境を知る」学習を計画した。３・４年生は、学校の周りや自分の家の周りを調べて、『地域のハザードマップ』を作り、「自分たちが暮らす地域の危険個所」に目を向け、安全な行動について考えられるようにした。５・６年生は、様々な災害について体験したり、映像で確かめたりしながら水害への備えや対策の提言をまとめた『防災手帳』を作成し、学習したことを全校児童や保護者・地域へ発信することとした。

２　取組の内容・方法等

（１）全校の取り組み：小中合同避難訓練

◆第１回小中合同避難訓練

①　日　時　平成２８年５月１１日(水)　　１３時３０分　～１５時２０分

②　参加者　東渓小学校児童：８２名　教職員：１５名

③　ねらい　ア　洪水や土砂災害発生の可能性が高まった中で、早期に下校するために必要な行動や心構え等について体験を通して理解の促進を図る。

イ　洪水や土砂災害発生により早期の帰宅が困難になった場合の避難所施設（学校施設）の活用のあり方や小中学生が安心して避難所で過ごすための方策について体験を通して理解の促進を図る。

ウ　職員のめあてを明確にし、場面ごとの対応の在り方の問題点を洗い出す。

④　課題と対策

ア　避難場所であるが、増水時に橋を渡る危険性を考えると中学校に避難すべきではない。

イ　並び方は下校班より学年別のほうが把握しやすい。また、移動のたびに人数確認が必要。

ウ　避難時に児童が不安にならないように、読み聞かせの本などがあるとよい。

◆第２回小中合同避難訓練

①　日　　時　平成２８年１０月１９日(水)　　１３時３０分　～　１４時５０分

②　参 加 者　東渓小学校児童：８２名　教職員：１５名

③　想定災害　大雨が続いているにもかかわらず矢瀬川の水が減ったため、自然ダムの決壊等による急激な増水が懸念され、決壊すれば本校校舎の１階部分も浸水する可能性がある。

④　ね ら い　３階への垂直避難の際の問題点を見つけマニュアルに反映させる。

⑤　課題と対策　ア　対策本部で決まったことは、職員集合で伝達する。

イ　バスで下校させる場合はバス担当が名前プレートで確実に確認を行う。

ウ　非常持ち出し品の整理、およびケースの準備（整理をし、表示も付けた。）

(２)全校の取り組み：学校待機・引き渡しマニュアルによる引き渡し訓練

◆緊急の児童引き渡し（６月２２日）

①　状　況　訓練前のこの日、大雨のため午後「避難勧告」が発令された。下校時にスクールバス６台中４台が運行不可となり、４台のバスに乗車する児童を保護者へ引き渡すこととした。「緊急時引き渡しカード」を活用し、マニュアルに沿って実施した。

②　課題と対策（引き渡しを行って明らかになったこと）

ア　迎えに来るのが遅くなった保護者がいた。⇒メール配信の際、引き渡しの時間を区切り、遅れるところは連絡してもらう。３０分以上連絡がないところには学校からかける。

イ　中学校と時間のずれがあった。⇒同じバスを利用するので細かい連携が必要。

ウ　人員配置について⇒運動場出口はいなくても大丈夫なので、忙しかった受付に回す。

エ　引き渡しカードが使いにくい⇒項目を見直し、できるところは〇印で。

オ　保護者送迎の児童、学童へ行く児童も、きちんと確認して引き渡す。

◆学校待機・引き渡しマニュアルによる引き渡し訓練（７月１２日）

①　訓練の目的：災害・事件事故発生時に児童の安全を確保し、保護者等へ確実に引き渡す。

②　引き渡しをする場合の基準

ア　スクールバスの運行が不能の場合

イ　通学路の安全が確保されている場合(児童・引き取り人の安全確保)

③　課題と対策　ア　学校配信メールに登録してない保護者に、登録を再度呼び掛ける。

イ　日中、連絡がつかないところが多いため緊急連絡先の見直しが必要。

（３）学年ごとの取り組み：第１・２学年実践報告（生活科）

① はじめに

学校のすぐ裏を矢瀬川が流れ、下校時やプールの行き帰りなどで橋を渡る際に子どもたちは川をよく眺めている。４月に玖珠川河川敷で鮎の放流をした。自分たちが放流した鮎が川に戻ってきているかなと関心を持って眺めることもあった。学校からも川を見ることができ、「カメがいる」「アヒルがいる」「魚が泳いでいる」など、普段の生活の中で川とのつながりも深い。たくさん雨が降ると川の水が濁ったり、水が増えたりして川の様子が変わることを実際に見てよく知っている。そこで、川の上流や下流では川の様子はどうなっているか見学して、川への関心を深める学習をすることにした。

② 取り組みの内容・方法

○単元名：矢瀬川の上流、下流を見てみよう

○ねらい：矢瀬川、玖珠川の上流や下流では川の様子が違うことを知る。

○単元計画

次	時	題　　目	学　習　内　容
1	1～3	学校の近くの川を見てみよう	学校の近くを流れる矢瀬川や玖珠川を見学し、場所によって川の様子が違うことを知る。
2	1～4	三隈川の様子を見てみよう	矢瀬川や玖珠川の下流の三隈川を見学したり、朝霧の館での説明を聞いたりして、学校の近くの川の様子との違いを知る。

③ 取り組み（授業）の様子

○川の上流を見て、学校の裏の矢瀬川の様子とはどんな違いがあるのか比べてみた。

二つの川が一つになってるよ

川の中に階段があるよ。

○川の下流（三隈川）を見学し、学校の近くの川との様子の違いを比べてみた。

家の近くの川はどこに流れているのかな？

学校の近くの川が写っているよ（朝霧の館）

④ 実践の成果

学校の横を流れている矢瀬川の上流や下流を見学して川の様子が違うことを知ることができた。上流では「小さい川が２つくっついて１つの川になった」「学校の横の川に比べて水の量が少なかった」ことがわかった。川を下りながら様子を見学して川の周りに草がいっぱい生えているところ、渕になっているところ、護岸工事や砂防堤防があることを見つけた。矢瀬川が玖珠川に合流するところでは「川の上流と比べて水がとても多い」「川がとても大きい、川の幅が広い」ことがわかり場所により川の様子は違うことが分かった。

三隈川の見学では、せきから勢いよく流れる大量の水を見て「こわい」「声が聞こえない」と圧倒されていた。下流に行くほど川が大きくなり水の量も多いことがわかった。

三隈川交流センター「朝霧の館」では、平成２４年７月におきた九州北部豪雨のＤＶＤを見て、川や周りの様子が一変したことに大変驚いていた。川は災害を起こすこともあると知り、どうしたら身を守ることができるか考えるきっかけになった。また、川を監視するシステムや災害が起きないように川の水を調整して流す装置を見学し安全を守ってくれている人がいることを知った。

⑤ 残された課題

今回の学習で学校の近くの川を見学して、場所によって川の様子の違いを知ることができた。さらに学習を深めて、危険なところはないかを意識して生活できるようにしたい。

（４）学年ごとの取り組み：第３・４学年実践報告　（総合的な学習の時間）

①　はじめに

３・４年生は、１・２年生の生活科の学習で学校の周りの様子や施設について、また，社会科の学習で校区の特徴について調べるなど、自分たちが住む地域について学習してきた。しかし、毎日登校時に見る自分の家の周りや通学路の様子にはあまり関心がなく、様子を尋ねても答えられない子が多い。家庭でも、家の周りで遊ぶ子は少なく、移動も車なので、あまり周辺に目を向ける環境ではない。しかし、昨今の災害で実際に避難を経験したり、避難訓練を重ねたりと、災に関する意識は高まっており、今までとは違った視点（家の周りの危険箇所、災害を防ぐための対策施設など）で、自分たちの住む地域を見ていくことで災害に対する備えをしていくことの必要性を考えさせたい。

②　取り組みの内容・方法

○単元名：　身の周りで想定される災害について考える

～東渓小校区のハザードマップ作りを通して～

次	時	題　　目	学　習　内　容
1	1	災害から身を守るって？	○自然災害とはどんなものか知り、どうやったら身を守ることができるのかを考える。
	2 3	ハザードマップを見てみよう	○「日田市災害ハザードマップ」を見て、どんな情報が表示されているのかを確認する。 ○東渓小の付近の洪水や土砂災害の危険箇所を調べる。 ○自分の家の位置を確認し、自分の家の周りの洪水や土砂災害の危険箇所を調べる。
	4 5	危険箇所を見に行こう	○「日田市災害ハザードマップ」で確認した東渓小の付近の洪水や土砂災害の危険箇所を実際に行って確かめ、どのような場所が危険だと想定されているのか知る。 ○災害を防ぐための対策施設を実際に見て確かめ、災害への備えがなされていることを知る。
2	6 (夏季休業中)	自分の家の周りを調べよう	○自分の家の周りの危険箇所（大雨，台風，地震などで）について実際に目で見て確かめ、写真を撮ったり，絵に表したりして、どのような危険があるのか表にまとめる。 ○家の周りの地図を書き、調べたことを付け加えて、自分の家の周りのハザードマップをつくる。
	7 8	校区のハザードマップを作ろう	○家の周りのハザードマップを基に調べたことを同じ地区に住む友だちに説明し互いの家の近くの危険箇所を確認する。 ○「日田市災害ハザードマップ」に、自分たちが調べてきたことを書き入れ、自分たちのハザードマップをつくる。
	9 １０	自分の住む地区の危険箇所を知ろう	○自分の住む地区の危険箇所を実際に見て回り、どのような場所が危険なのか確かめる。
3	１１ （公開研）	大雨による災害について学ぼう	○災害の様子を具体的に知り、想定場面でどう行動するか班で話し合うことを通して、大雨による災害時に、身を守るためにはどう行動すればよいか考える。（大分地方気象台からゲストティーチャーを招いて公開授業を行う。）
4	12～14	水害対策施設を見に行こう	○ダムを見学し、治水施設であるダムは水害対策としての役割があることを知る。

○ねらい：校区や家の周りにはどんな危険があるのかを実際に見たり、ハザードマップを作ったりすることで知り、日頃から災害に備えようとする気持ちを育てる。

○単元計画（※　気象用語については随時指導する）

③　取り組み（授業）の様子

＜１学期＞

「日田市災害ハザードマップ」を見る

東渓小の校区は３枚の日田市災害ハザードマップに分かれている。それぞれ、河川氾濫時の浸水想定区域とその水深および土砂災害の危険箇所を示し、避難場所や災害時の関連施設などを表示している。地図の大まかな見方を確認し、川のまわりは浸水想定区域になっていること、山の近くにはがけ崩れ、土石流、地滑りが起こりやすい範囲が多いことなどに、気づくことができた。また、自分の家のある位置を近くの友だちと地図を見ながら探し、自分の家の周りがどんな災害の危険箇所なのか、色分けを見ながら確かめていた。「ぼくの家は川のそばだから、雨がたくさん降ると危ない」「家の裏が山だから、この前雨がたくさん降ったとき、避難した」など、自分の体験とマップの内容を重ねて考えられる子どももいた。

東渓小付近の危険箇所を実際に見る

東渓小は、玖珠川に流れ込む矢瀬川が裏を流れており、その横は急な崖になっている。日田市災害ハザードマップによると、がけ崩れの危険箇所に入っている。どのような地形や様子が危険なのかを確かめるために、実際に見に行ってみた。日ごろ何気なく見ている場所だが、改めて見てみると、がけの高さ、植えられている木の様子、川の幅、流れる水の様子など、初めて気づいたことも多かったようだ。

対策施設もあり、どんな目的で造られたものか、考えることができた。見つけた対策施設の役割について、４年生が３年生に説明している姿も見られた。

教室前の３階廊下から見える「のりわくエ」

学校のそばにある家の裏手の「ようへきエ」

ここから一番近い避難所は東渓中学校だね。ハザードマップにものっていたね。

＜夏季休業中＞

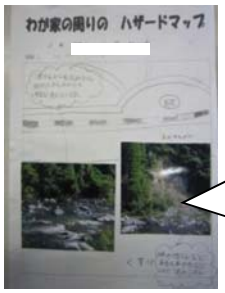
自分の家の周りのハザードマップづくり

自分の家の周りの危険箇所（大雨，台風，地震などで）について、実際に目で見て確かめ，まとめる活動を夏季休業中に各自で行った。１学期中に学校周辺を見ていたので、イメージしやすかったようで、大雨がたくさん降ったら、地震がきたらなど、いろいろな災害を想定して確認することができていた。家庭にも協力を仰ぎ、様子が伝わるよう写真を撮ったり、絵に表したりして、具体的に説明できるようにまとめることができた。

学級の中や３・４年生で調べたことを交流した時には、写真を指さしながら説明するなど、家の周りの様子をよく理解し、伝えようとしていた。

夏休みに、自分の家の周りの危ない場所を調べた。大雨や地震などが起きたらどうなってしまうのか、想像しながら、各自家の周りを確かめた。気になる場所の様子や説明をくわしく書いている。

調べたことをもとにして・・・



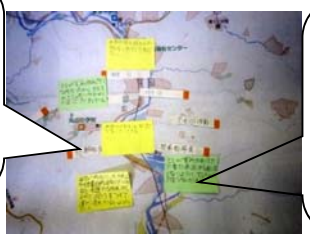
様子と説明を絵地図に表した。矢印を入れたり、写真に番号を付けたりして工夫し、調べたことと危険箇所の位置がすぐにわかるようにした。

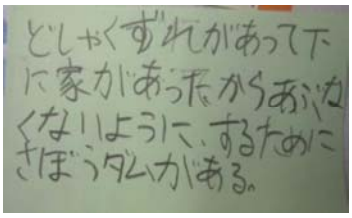
＜２学期＞

校区のハザードマップを作る

３・４年生の子どもたちを、住んでいる地区ごとに３つのグループ（日田市災害ハザードマップによる）に分け、調べてきたことを日田市災害ハザードマップに表した。「洪水」、「がけ崩れ、地滑り、土石流」は付箋で色分けし、どのような危険があるか記述したものを貼った。また、子どもたちが撮った写真や絵なども貼り、具体的にどんな様子なのか、危険箇所・対策施設をわかりやすく伝えられるように工夫した。家が近くの子どもたちは、「ああ，あそこね」と互いに危険箇所を確認したり、「これはここじゃない？」と地図で一緒に場所を探したりなど、自分の地区への関心を深めていた。

自分の家の場所を確認し、同じ地区の子どもと交流した後、日田市災害ハザードマップに表した。緑の付箋は「がけ崩れ、地滑り、土石流」、黄色の付箋は「洪水」に関することを書いている。細い付箋の所には、写真を貼る予定である。





＜３学期＞

(大山ダム)の見学

治水施設であるダムには水害対策としての役割がある等の説明を受けた。子どもたちからは、「洪水を防ぐために作られたこと」「自然環境を守る努力をしていること」などが分かったとの感想が出された。また、平成２４年の洪水のとき、大山ダムは完成前であったが、水をためることができ、下流が洪水にならなくて済んだこともわかった。

４年生公開授業（研究発表会）

第４学年は１月１７日の研究発表会の際、気象台からゲストティーチャーを招き「経験したことのない大雨、そのときどうする？」の学習を公開授業で行った。与えられた条件の中でどう行動すればよいのか話し合いを通して考えることができた。（詳細は次頁参照）

④　実践の成果と課題

周りを山で囲まれ、そばを川が流れるような環境に暮らす子どもたちが多いので、自分の周りにも災害がおこりうるという意識を持たせることは必要だと考える。自分の安全は自分で守れるように、まずは身近にある危険な場所を知っておくことが大切であろう。この学習を通して実際に調べたことで、日ごろ何気なく見ている景色の中にも災害の危険が潜んでいること、また、何らかの対策が施されていることに気づくことができた子どもが多かった。このような見方は子どもたちが成長し、この地域を離れたとしてもきっと役に立つだろう。

知ることができた後は、災害時にどう行動するか考える力が必要になってくる。今回、家の周りの危険箇所調べは、保護者も一緒になって取り組んでいただいた。どのように避難するのか、家族とどう連絡をとるのか、非常時に持ち出すものは・・・などは，普段から家族と相談し準備しておいてもらいたいことである。家庭と連携しながら，保護者も子どもも意識を高めていけるような防災学習にも取り組む必要がある。

（５）学年ごとの取り組み：第４学年実践報告（公開授業：総合的な学習の時間）

◆第４学年　総合的な学習の時間　学習指導案

指導者　　樋口　友美（４年担任）

ＧＴ　　飼野　達也（大分地方気象台予報官）

①　題材名　　専門家を招いて、大雨による災害について学ぼう

②　目　標　　大雨による災害がもたらす危険について関心をもち、災害から身を守るための行動を考えることができる。

③　指導の立場

ア　題材について

大雨による災害から身を守るためには、日頃から身の周りの危険箇所を知っていることや気象情報を上手に活用して、適切な行動をとることが大切である。本題材は、大雨によって起こりうる災害や気象情報の入手の仕方について学び、与えられた条件下でどのように判断して行動するかをワークショップを通して考えることができるものである。

イ　児童について

何事にも意欲的に取り組もうとする子どもたちである。４月の熊本地震では大きな被害はなかったものの、揺れによる恐怖を味わったり、崖の近くに住んでいるため避難所に泊まったりするなどの経験から、避難訓練や防災学習に真剣に取り組むことができている。６月には大雨による河川の増水を目の当たりにし、日頃から雨の降り方や河川の様子には敏感になっている子どもが多い。雨が続くと、休み時間のたびに矢瀬川の様子を窓から見たり、防災無線が流れると耳を澄まして聞き入ったりする姿が見られる。

天気の変化は５年の理科で学習するが、気象用語について、梅雨入り宣言が出された時から少しずつ学習を始めた。その中で台風や雷、竜巻の発生や天気は西から変化すること、１年間の降水量の４分の１から３分の１が梅雨の１ヶ月半の間に降ることなどにも触れた。

身の回りの危険箇所を知るため、ハザードマップを使った学習を行った。市が作成したハザードマップでは大まかな危険箇所を知ることができたが、自分のこととしてとらえるには難しかった。そこで、「どこがどう危ないのかが、ひと目でわかるように」と、学校や自宅周辺の危険箇所を実際に調べ、写真や危険なことの説明を入れたハザードマップ作りに取り組んだ。同じ地区の子どもたちで協力して、場所を確認したり、説明を考えたりして、オリジナルのハザードマップを作ることができた。

これまでに取り組んだ避難訓練では、「大雨のため学校に泊まることになったら、何が必要か」ということについても考えさせた。生活経験の差が大きく、衣食住に分けて「料理はできないからそのまま食べられるものがいる」「ニュースを聞くためにラジオがいる」などと考えられた子どももいたが、具体的に考えることが難しい子どももいた。

ウ　指導について

本時では、はじめに大雨によって起こる河川の増水や氾濫、土砂災害について、映像を見せながらどのようなものなのかを理解させる。また、雨の程度によって気象台から発表される気象情報やその入手方法についても説明する。その際、子どもたちには難しい用語が多いので、あらかじめ説明の入った「聞き取りメモ」を用意し、用語の理解を助けるようにする。

その後、子どもたちの自宅周辺によく似た地形の地図を準備し、大雨が降り続き、注意報・警報・土砂災害警戒情報が発表されていく中で、いつ、どのような行動をするのかをグループで考えさせる。河川の近くや崖の近くでは、大雨の時どのような危険が起こるかを予想し、それを回避するための行動とその理由について話し合い、発表させる。これまでの学習や体験を想起し、さまざまな情報をもとに自分で考えて判断し、身を守るための行動をすることの大切さを学ぶ時間としたい。

④　本時案

ア　題目　「経験したことのない大雨　その時どうする？」

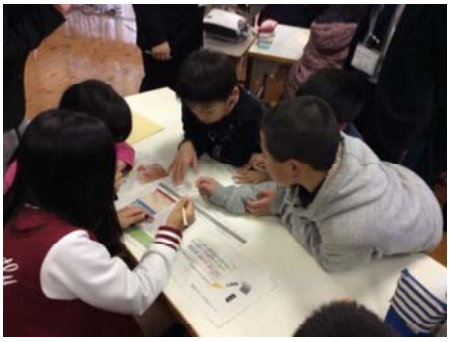
イ　主眼　大雨による災害時に身を守るためには、危険な場所を予め知り、情報を入手し考えて行動することが大切であることを、災害を具体的に知り、想定場面でどう行動するか班で話し合うことを通して理解し、自己の行動につなぐことができる。

ウ　展開（６０分）

学習活動	時	形態	指導・支援上の留意点	評価
１．学習のめあてを知る。	2	一斉	○学習の流れとめあてを知らせる。 【めあて】 大雨が降った時、どんな災害が起きるかを予想し、身を守るためにはどうしたらよいかを考える。	
２．大雨災害と災害から身を守る話を聞く。	16	一斉	○ＧＴとやりとりをしながら、大雨による災害について説明する。 ・大切だと思うところは、線を引いたり書き込みをしたりしながら話を聞かせる。　（聞き取りメモ）	
３．グループワークを行う。	26	班 （６人ずつ３班）	○グループワークの説明をする。 【課題】 災害にあわないためには、どのタイミングで、どんな行動をしたらよいでしょう。	
家の場所の設定 Ａ：川のそば Ｂ：崖の近くで用水路のそば Ｃ：崖の近く			○時間の経過とともに次々と発表される気象情報を知らせ、いつ、どんな行動をするのか、なぜそう考えたのかを話し合わせる。（ワークシート、地図） ・避難するかどうか迷っている班には、住んでいる場所を思い出させたり、移動にかかる時間や周りの様子を考えさせたりする。 ・「避難所へ避難する」と考えた班には、避難ルートを地図に書き込ませる。 ・意見がまとまらない班には、それぞれに、なぜそうしようと思うのか理由を言い、別の意見の人を説得するよう投げかける。 ・警報が発表されたときに避難した班には、次の土砂災害警戒情報のときには、避難した場所でどのように過ごすかを考えさせる。 ○発表の手順を説明し班ごとに発表の準備をさせる。 ○発表（各班３分）を聞いて、質問や意見を出し合う。	家の場所と情報をもとに、行動とその理由を考えている。 （思考・判断）
	13	一斉	○講評をする。（ＧＴ） ○今日の学習で学んだことを発表させる。	
４．発表をする。 ５．学習の振り返りをする。	3	一斉	【まとめ】 ・近所の危険な場所を前もって知っておく。 ・情報を手に入れる。⇒身を守るための行動をする。 ○災害への心構えをもつことをおさえる。（ＧＴ）	

⑤　授業の様子

担任とｹﾞｽﾄﾃｨｰﾁｬｰで進めます。



「 地図で見ると、川が近いね。」

「こっちから逃げないと危ないよ。」

「ぼくたちの班で考えた避難の仕方を説明します。」

⑥　振り返り

災害から身を守るためには、家の近所の危険な場所を事前に知っておくことや、情報を手に入れることの２点が大切であることを、子どもたちは説明と体験からよく理解できていた。話し合い活動は短い時間であったが、与えられた条件のもと、身を守るための行動を考えていた。警報が発表された段階で避難するかどうか、多くの子どもたちが迷っていた。この段階では２階に避難すればよいと考えた子どもも多かった。しかし、「警報が出された時には土砂崩れが起こるかもしれない。土砂崩れで１階がつぶれてしまったらもう逃げられない」と考えた子どもの発言によって、崖の近くに住んでいる場合は、大雨・洪水警報が発表されたら避難をしたほうがよいと考えることができた。また、避難経路についても、河川や用水路の近くは増水・氾濫が予想されるので、そこから離れた道を通るほうがよいと考えることができていた。

以前から、大雨による災害に対する意識が高い子どもたちであったが、この学習を通して、住んでいる場所の地形や住居、雨の降り方や河川の様子、気象情報など、様々な状況を考慮した上で、身を守るための行動をとることの大切さを学ぶことができた。このことは、今後、子どもたちがほかの場所で生活をすることになった場合でも、危険な場所に気付き、自分の身を守ることができる力につながっていくと期待している。

（６）学年ごとの取り組み：第５・６学年実践報告　（総合的な学習の時間）

①　はじめに

５年生１０名、６年生９名という少人数の２学級である。全体的に真面目で、出された課題に対しては、何とかしようという気持ちをもって臨むことができるよさがある。しかし、積極的に自分の意見を人前で発表したり、新しい行動を起こしたりすることが苦手な子が多い。そこで体験型防災教育を仕組むことで、災害のメカニズムを主体的に学び、同時に災害の原因に気づき、一人ひとりが日頃から防災活動に参加する必要性を感じてほしい。いざとなれば、誰かに任せるのではなく、高学年として下級生へ的確な指示をしたり、弱い立場の人の手を引っ張って避難したりする姿を期待している。

②　取り組みの内容・方法

ア　単元名　　防災について、体験学習してみよう！！

イ　ねらい　　体験型防災教育をすることで、主体的に防災について学びながら災害時に迅速かつ的確な対応力が身につき、防災に対する「意識」と「行動力」を高めることができる。

ウ　単元計画

次	時	題　　目	学　習　内　容
1	1	防災教育とは	防災教育のイメージを自分たちで出し合い、定義について学ぶ。
2	1～6	防災学習施設見学	「くるめウス」と「防災センター」を見学することで、防災と環境の関連性を学ぶ。
3	1～3	水害について考える	平成２４年の日田の大水害による被害を動画や静止画で確認し、水害の起こる時期に向けて自分たちでできる対策や備えを考える。
4	1～2	着衣泳で安全教育を学ぶ	授業参観でペットボトルを使って水難訓練を実施することで、夏休みの河川や海での事故防止についての知識と行動を親子で学ぶ。
5	1～6	蒲江合宿で津波対策を考える	蒲江の海水浴で津波が起きたとき、どういう避難経路をたどって避難するかを考え、そのまとめとしてしおりにマップを挿入し、実際に現地で確認する。
6	1～2	豪雨体験から学ぶ	発生件数が増えているゲリラ豪雨を体験することで豪雨の怖さを実感し、身近な水害に備える。
7	1	防災グッズを揃え､校内の備蓄倉庫を作る	防災バッグの中身をみんなで考え、自分たちで準備できる物をバッグに入れて学校に持参し、それを特別教室に保管することで校内の備蓄倉庫を作り、非常時に備える。
8	1～4	防災手帳を作る	「地域別ハザードマップ」を挿入した「東渓小防災手帳」を完成させそれを全校に発表する。また、地域の方にもそれを配布する。

③　取り組み（授業）の様子

＜１学期＞

ア　防災について

「災害」は大きく分けて「自然災害」と「人的災害」の二つである。今回は特に「自然災害」の被害を知り、対策を考え、行動する（準備）することを「防災」と定義した。

イ　防災学習見学

◆「くるめウス」見学

筑後川防災施設「くるめウス」は、昭和２８年の大水害の記録を伝え、災害（洪水）から身を守る治水の大切さや防災・減災・河川環境の保全、河川愛護意識の啓発を目的とした河川情報拠点施設である。

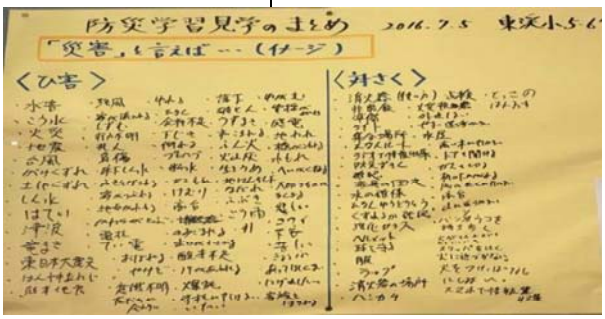
洪水が起きやすい
地形についての説明

平成２４年の九州北部
大水害の記録

データ放送ｄボタン
を活用した防災情報

昭和２８年の大水害に
よるクスノキの流木

筑後川は、三隈川も含むので、水害被害は日田市だけではなく、他県の流域全体に関わることが分かった。



地形に合わせた防災学習が必要であることを学んだ。（日田は自然が豊かなので、水害対策の必要性大！）

◆福岡市民防災センター見学

福岡市民防災センターは、いざというときのために、実際にいろんな災害を模擬体験して、防災に関する知識・技術・行動力を身につける施設である。

A．

B．

C．

D．

A．火災体験…室内は迷路状。煙で非常灯しか見えないので、子どもたちは暗さだけでなく、煙の恐怖と出口が分からない不安でドキドキしたようだ。
B．模擬消火体験…消火器の使い方の講習を受けた後に、モニターの火を消すことができた。あわてて手順を間違えたり、時間オーバーで消火できなかったりする子もいた。
C．地震体験…震度４と６強を体験し、震度６強では机の柱につかまっていないと体が浮いてしまうほどの大揺れの中、机の下に隠れる訓練をした。
D．強風体験…風速３０ｍを体験。息苦しさを感じながら下を向いて立っているのがやっとだった。

どの体験も想像以上に恐怖感や不安感があり、体験終了後、ほとんどの子どもが「怖かった。」と言っていた。 この体験を機に防災についての関心度や知識向上を図り、「行動力」を身につけることができた。今後この体験を生かし、突然の災害にも慌てることなく冷静に対応ができることを期待している。 このような体験学習型の見学は、想像以上に迫力があり、防災教育を進めていく上でとても重要だと感じた。

ウ　水害について考える

平成２４年度に起きた日田市の大水害の様子を視聴させた後、「激しい雨や風の時の危険」についてグループごとに考え、発表した。大雨の後も危険な場所に行かない、自宅待機する、非常用持ち出しバッグを用意するなど、高学年らしい意見が出された。

＜夏休み＞

＊津波避難経路図　　＊看板

エ　集団宿泊体験で津波対策を考える

５年生は、蒲江マリンカルチャーセンターで集団宿泊体験を行った。海での海水浴が活動のメインだったので、ＡＥＤを持参し、津波からの避難という安全面に重点を置いた。

特に、山間部の学校なので津波災害をイメージしにくいため、教師が防災の視点で下見を行い避難経路図を完成させた。事前に子どもたちと現地の写真と地図とで避難場所と避難の仕方を考え、当日も実際の避難場所や海抜〇ｍの看板を確認した。有事に備えることで、校外でも命を守る視点をもつことに大きな差が出てくることを改めて感じた。

＜２学期＞

オ　防災グッズを揃え、校内の備蓄倉庫を作ろう

災害によりライフラインが一定期間止まった場合、自宅を離れて避難所生活が始まった場合にどんなものが必要かを子どもたちと考えた。子どもの意見をリストアップし板書に位置づけた。途中から校長が実際に防災バッグ（非常持ち出し袋）の中身を子どもに見せながら優先順位や個人差があること、衛生面に気をつけること（トイレ他）などをポイントに説明した。それをふまえ、実際に防災バッグを自分たちで揃え、特別教室に備蓄した。また、災害時は電気が使えないことを想定しアルファ化米を試食した。容器に熱湯また水を注ぐだけで米飯が食べられる非常食の味は、意外と子どもたちには好評だった。

＜３学期＞

カ　「地域別ハザードマップ」を作ろう

防災教育モデル事業研究大会の発表後、東渓中学校と東渓小学校４年生が作ったハザードマップを参考に、「地域別ハザードマップ」を作成した。このマップには、４地域（馬原・桜竹・丸山・台）ごとの地図になっており、安全教育の視点（不審者など）も追加されている。

キ　「東渓小防災手帳」で防災意識を高めよう

２学期に活用した防災手帳をもとに「地域別ハザードマップ」を挿入した「東渓小防災手帳」を完成させた。１年間、防災教育に取り組んだ学習の成果として、この手帳を全校児童に配布し、内容を説明した。また、今年度中に、この防災手帳を地域の方に配布することも計画している。子どもたちが作成した手帳が地域の防災に役立てば、さらに、防災意識が高まるものと期待している。

④　実践の成果と課題

知識を入れるインプット学習も大事であるが、今回は、講師を招いたり、実際に校外に出かけたり、自分で活動したりする体験を通して防災について学び、五感を使ったアウトプット学習を行った。

この体験が、いざというときに「経験」となって役立つはずである。どの学習場面でも真剣に取り組むことができたのは、子どもの生活に直結したものだったからだろう。このような体験学習型の防災教育を、親子や地域の人と企画していければ、さらに防災学習の効果があがると考える。